



## 答え合わせ・解説

問1	答え 4 地頭	地頭は、御家人の中から任命され、土地の管理や年貢の徴収を行いました。単なる管理役にとどまらず、次第にその土地での権力を強めていき、武士の地方支配の拠点となりました。特に承久の乱の後には、幕府が地頭を全国の荘園や公領に配置したことで、幕府の統治範囲が飛躍的に拡大しました。
問2	答え 3 文永の役	1274年の文永の役と、1281年の弘安の役の2度、元軍が九州北部に襲来しました。元軍は火器などを用いた集団戦法で攻めてきましたが、御家人たちの奮戦や、暴風雨の影響もあり、幕府はこれを退けることに成功しました。
問3	答え 1 京都	御家人の重要な軍役の一つに、京都の警備を担う「京都大番役」があります。これは、将軍の命令により一定期間、京都へ赴き治安維持を行うものでした。他にも鎌倉周辺の警備も担当しており、これらは御家人が将軍に対して奉公を果たす具体的な役割でした。
問4	答え 2 鎌倉幕府	鎌倉幕府は「御恩と奉公」という主従関係を基盤に、地頭や守護を配置して日本全国の武士を統制しました。13世紀後半に元からの脅威にさらされた際、執権の北条時宗のもとで二度にわたる侵攻（元寇）を撃退しました。
問5	答え 2 徳政令	幕府は、御家人が借金を返済しなくてもよいことや、質入れした土地をただで取り戻せるようにする徳政令を1297年に出しました。これにより、御家人の経済的な立て直しを図りました。
問6	答え 1 踊念仏	一遍が始めた「踊念仏」は、太鼓を打ち鳴らし、念仏を唱えながら踊ることで、深い宗教体験を得ようとするものです。この活動は非常にエネルギーで視覚的にも人々の注目を集め、武士から農民、商工業者まで幅広い階層の人々を熱狂的に惹きつけました。
問7	答え 1 主従関係	主従関係とは、将軍が土地を保障する「御恩」と、御家人が軍役を果たす「奉公」が対になったものです。この契約的な関係により、将軍は御家人を束ね、軍事力を維持しました。土地を媒介として「御恩と奉公」を繰り返すことで、幕府は全国の武士を支配下に置くことができました。
問8	答え 4 フビライ	第5代皇帝フビライ・ハーンは国号を「元」と改め、大都（現在の北京）を拠点に東アジアの覇権を握ろうとしました。彼は日本に対しても外交使節を派遣して服属を求めましたが、幕府がこれを拒否したため、1274年の文永の役と1281年の弘安の役という2度の遠征軍を日本に送りました。
問9	答え 4 金剛力士像	東大寺南大門に配置された金剛力士像は、運慶と快慶らの工房が分担して短期間で完成させました。筋肉の盛り上がりや血管の浮き出た表現、衣のひだの動きなど、極めて写実的で生命感あふれる特徴を持っています。
問10	答え 2 厳格	鎌倉時代の武士は、富や権力を誇示するよりも、質素で厳格な生活を送り、主君に対する絶対的な忠誠を誓うことを美徳としました。この精神性は、仏教の禅宗の普及とも結びつき、武士社会における倫理規範として定着しました。
問11	答え 2 随筆	随筆（エッセイ）は、決まった形式に縛られず、個人の内面や世の中に対する洞察を記すものです。鎌倉時代には吉田兼好の『徒然草』が、平安時代の清少納言の『枕草子』と並ぶ代表的な随筆として知られます。
問12	答え 4 六波羅探題	六波羅探題は、京都の六波羅に設置された鎌倉幕府の重要機関です。朝廷の監視だけでなく、京都周辺の治安維持や、西国の御家人の統制、さらには京都で起こった裁判の処理などを幅広く担当しました。北条氏の一門がこの長官に就任することが多く、幕府の西国支配における最前線の拠点としての役割を果たしました。
問13	答え 4 後鳥羽上皇	後鳥羽上皇は、自らを支持する武士たちを集めて幕府軍への反撃を試みました。しかし、北条政子の檄に応じた御家人たちの結束によって幕府軍が勝利しました。戦後、後鳥羽上皇は隠岐（現在の島根県）に流され、朝廷の権威は以前よりも大きく低下することとなりました。
問14	答え 3 他力本願	他力本願は、自分の力で行う修行（自力）に頼るのではなく、すべてを阿弥陀仏の力（他力）に任せて救いを求める考え方です。親鸞はこの姿勢こそが真の信仰であると説き、出家せずにとだ念仏を唱えるだけで救われる道を提示しました。
問15	答え 2 世界の記述	『世界の記述』（あるいは『驚異の書』とも呼ばれる）は、モンゴル帝国（元）のフビライ＝ハーンのもとでの体験、中国の高度な文明、さらには日本などの周辺国の様子が描かれています。これにより、ヨーロッパの人々に東洋の地理的な広がりを伝え、当時の人々の世界観を根本から書き換えました。
問16	答え 1 鎌倉時代	この時代には、戦乱の不安や厳しい生活環境を背景に、無常観を混えた文学が発展しました。鴨長明の『方丈記』のように、世の移り変わりや自然の厳しさを冷静に見つめる作品が数多く書かれました。